☆第 98 回上智大学哲学会大会のお知らせ

今春、下記の要領で第 98 回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2023 年 6 月 24 日（土）13：00～16:30
会場：上智大学四谷キャンパス 7 号館 14 階特別会議室

★ プログラム

Ⅰ　研究発表　13:00～15:15

〇松本健（本学大学院文学研究科博士後期課程）
　フェルナンド・サバテールの倫理思想の徳倫理学的解釈
　　――新アリストテレス主義との比較――

〇蓬田優人（東北大学大学院文学研究科日本学専攻日本思想史研究室）
　松永材とその「日本主義」

〇庄子　綾（本学文学部哲学科非常勤講師）
　カッシーラーとカント『判断力批判』の関わり
　　――構想力と感情についての考察――

――休憩――

Ⅱ 講演　15:30～16:30

〇山内志朗（慶應義塾大学文学部名誉教授）
　中世哲学と〈セカイ系〉を結びつける

Ⅲ　懇親会　17:30～19:00

於：上智大学四ツ谷キャンパス　2 号館５階教職員食堂

参加費：	上智大学哲学科教員	4000 円
	上智大学哲学専攻在籍大学院生	1000 円
	本学会会員	2000 円

☆講演要旨

中世哲学と〈セカイ系〉を結びつける

山内志朗（慶應義塾大学文学部名誉教授）

セカイ系とは何か。それをアニメにおける或る時期のブームとして捉えることはできる。私はそこに二〇〇〇年以上にわたる思考の系譜学的な流れを感じてしまう。古代のグノーシス、中世の聖霊主義、中世末期の唯名論、ライプニッツのモナドロジー、カントの先験的仮象論、新世紀エヴァンゲリオン、セカイ系など、私は共通の流れを感じる。非媒介的な存在論の構図を感じてしまう。

私自身は、昔から共約不可能性(incommensurability)として考えてきたものである。私自身が期待している枠組みに沿ったものを恣意的に選んでつなげているだけの可能性もあり、大声で主張できるようなものではない。今回は、中世哲学にける唯名論という、とても誤解されやすく、私自身誤解の衣を厚く纏わされてきた思想の系譜について、本当の姿を示してあげたいという思いと、それが現代におけるセカイ系の発想とつながっているのではないか、という予想を考えてみたい。もちろん、セカイ系を哲学的枠組みに収めることも難しく、様々な批判が加えられるだろう。そして唯名論の整理についても異論が多く出されそうだ。

今回の話では、普遍的な不条理と個人的な不条理との無媒介的対応の側面を〈セカイ系〉に読み取ることで、中世の聖霊主義や唯名論と対応する論点を取り出したい。

道具建てとしては、アリストテレスが『詩学』において提示した劇の六つの構成要素を糸口にする。劇の構成要素六つとは、1)筋（ミュトス、プロット）、2)性格（登場人物、エートス、キャラクター）、3)語法、4)思想（ディアノイア）、5)視覚的装飾、6)歌曲である。

〈セカイ系〉において、登場人物にはか弱い美少女キャラが登場し、世界的危機に立ち向かうという「筋」が含まれている。語られている思想（ディアノイア）が〈セカイ系〉であるという発想は乱暴であるのかもしれないが、中世末期の哲学の或る傾向と現代のアニメを重ねて考える流れを語りたい。

☆研究発表要旨

フェルナンド・サバテールの倫理思想の徳倫理学的解釈
――新アリストテレス主義との比較――

松本健（本学大学院文学研究科博士後期課程）

本発表のテーマは「フェルナンド・サバテールの倫理思想の徳倫理学的解釈―新アリストテレス主義との比較―」である。本発表は、現代スペイン哲学者のフェルナンド・サバテールの倫理思想がもつ徳倫理学的な特徴を、現代徳倫理学における最大の思想的潮流である新アリストテレス主義との比較分析の結果を報告することを目的とする。

本発表では主にロザリンド・ハーストハウスによる『徳倫理学について（*On Virtue*）』において展開される新アリストテレス主義的徳倫理学との対比を用いる。

サバテールの倫理思想における徳倫理学的特徴というのは、「英雄」という有徳な行為の象徴や「理性的なエゴイスト」といった人格的な要素がその思想の中核にあるところに表れている。サバテールは「英雄」を自己構築の典型でありその者がもつ力は我々の行為の範例であるとし、それが示す卓越性が人々を徳へと誘惑するところの象徴として考えている。また、「理性的なエゴイスト」については彼の倫理において人々が欲するところのものである「人間としての自己」を最もよく実現する者として考えられている（通常我々がエゴイストの語で想起する種の者は排他的エゴイストとして忌避される）。

ハーストハウスをはじめとする新アリストテレス主義は倫理的な行為の決断に迫られたとき、然々の状況であれば「完全に有徳な行為者」であればどのように行為するかといった点を基準にして行為決断をするべきであると主張する。こういった点では、上記に示したサバテールの倫理思想における特徴と新アリストテレス主義の徳倫理との間に類似点があると言えよう。

しかし、注意せねばならないのは新アリストテレス主義の場合、アリストテレスがそうであったように、「勇気」や「節制」などの徳目を例示することも許容するがサバテールはそうではない。また、これはハーストハウスに見られる傾向であるが、彼女は『徳倫理学について』で義務論との接近を狙っている。しかし、サバテールの倫理が扱うのは義務（せねばならないこと）ではなく、我々がしたいと欲することであると考えているため、この傾向とは一見対立する関係にある。

本発表では以上の点に加えて、幸福（エウダイモニア）の点も含めた比較分析の結果を報告する。

＊

松永材とその「日本主義」

蓬田優人（東北大学大学院文学研究科日本学専攻日本思想史研究室）

1930 年代、日本国内において、五・一五事件や神兵隊事件等の、「昭和維新」と呼称される、右派勢力による政治・社会変革の思想・運動に端を発したテロ事件、クーデター未遂事件が勃発していたのと同時期、学術界では「日本主義の哲学」、つまり、「日本主義」「日本精神」といったイデオロギー、または日本の「国体」というものを哲学的・学問的に解釈・説明しようとする試みが、複数の人間によって提唱されていた。一見するとそれは、時局に便乗した言説のように映るが、戦前期における昭和維新運動、およびそれに起因した諸事件に関与した青年達に対して、彼らが運動を展開する上で、また、彼らが敵視していた当時のマルクス主義(およびその唯物史観)に対抗する上においても、理論を提供したというように推測される。そして、本発表で取り上げる哲学者・松永材(1891~ 1968)も、そのうちの一人として浮上する。

松永は元来、カントをはじめとするドイツ哲学の研究者であり、戦前の早稲田大学および國學院大學で教鞭を取った人物である。その一方で、1929 年には『日本主義の哲学』を著すとともに、國學院大の弁論部を拠点に、当時の昭和維新運動に参加した青年らを指導した人間でもある。しかし、松永の言説からは、テロやクーデター等の政治的決起を直接促すような記述は見られない。松永のもとに当時の青年らが集った理由としては、『日本主義の哲学』に見られるような歴史観、または、その上で展開される松永の「日本主義の哲学」の理論が挙げられるであろう。

さて、本発表は、当時の青年らを引き寄せた松永の「日本主義」とは如何なるものか明らかにすることを、主要な話題とするものである。その際、『日本主義の哲学』を著す以前の松永の論説・著作を紐解くところから始まるが、松永にとっての「日本主義」について、そのロジックが形成される過程を、それにより概観することができるだろう。また、ドイツ哲学の研究家であった松永が「日本主義」を提唱したその背景について、および、その思想を読み解く上での重要な鍵として浮上する松永の歴史観も、併せて考察するものである。

＊

カッシーラーとカント『判断力批判』の関わり
――構想力と感情についての考察――

庄子　綾（本学文学部哲学科非常勤講師）

エルンスト・カッシーラーの主著である『象徴形式の哲学』(1923～29 年) は、彼が長年に渡って取り組んでいたカント研究から、色濃く影響を受けていると言われている。その際、彼自身が『カントの生涯と学説』で述べているように、特に『判断力批判』を重視した上でのカント解釈が主著に取り入れられていると考えられる。ところが、主著の論述に目を向けると、カント哲学に関する説明は『純粋理性批判』からの引用が中心となっており、『判断力批判』との関わりは薄いように見える。それに加えて、主著全体を構成する基盤となっている箇所である第 3 巻のタイトルが「認識の現象学」であることも、彼にとっては「認識」の問題が最大の課題であり、彼の目標はカントに代わって新たな認識論を提示すること、いわば、新たな『純粋理性批判』を書き上げることであった、とも思われてしまう要因になりうる。しかし、言語・神話・科学といった人間の諸活動の広範な領域を扱う主著の方向性は、カントの第一批判よりもむしろ第三批判に近いものであるだろう。また、彼の言う「認識」という語の指す範囲は第一批判が担う分野よりも拡張されており、第三批判で扱われた事象も含まれていることにも、注意しなければならない。では、そうしたことを念頭に置いた上で、どのように第三批判からの反映を主著の中に見て取ることができるのか。以上のような問題意識や関心から、本発表では、カッシーラーの主著第 3 巻「認識の現象学」におけるカント哲学の概念の使用や適用の仕方を検討することで、彼が『判断力批判』 をどのように自分の思想に取り入れているのかを考察する。今回の発表では、第三批判との関連の深さから、「構想力 Einbildungskraft」と「感情 Gefühl」に関わる語に着目する。これらの語の使用への考察によって、カッシーラーにとって、構想力はいかなる場面でも産出的構想力であり、その構想力の持つ創造力・形成力は、人間の生の感情と関わっているという、『判断力批判』の主題と強く通底する部分が示されるだろう。